文章たんけん

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小学校の帰りに新しい道を見つけた「私」は、その道に咲いているいろいろな色のつつじを長い間ながめていた。

やがて、じっと見ていることにあきると、私は花が欲しくなった。原っぱや道ばたの雑草以外は、取ってはいけないと教えられていたので、つつじも手を出してはいけない花なのだ。でも、私も友達も弟の進も、ちょいちょいつつじの花をむしりとっては、ラッパのように口にくわえ、おしりの部分のかすかに甘いミツをすうのが好きだった。

つつじはどこにでもある。花もたくさんつく。一個二個三個取っても、誰にもわからない。*1七歳も六歳もそう考えた。実際、見とがめられることは、まずなかった。

①私は一番おしげのない感じのオオムラサキをつんだ。ほんのちょっとだけ、チュッと甘く、すぐに味のしなくなる花。つつじのミツをすう時は、絶対に一つだけではすまなくなる。私は次々にオオムラサキをむしっては、味見をしてすてた。そんな風に、短いつつじ並木の中をはしからはしまで歩いてしまった。

何気なく、ふりむいた私は、オオムラサキの花が点々とつながる、濃い桃色の道しるべに目を見はった。ヘビのようにきまぐれな曲線だ。左右の花をつんで、私がちょこちょこと歩いた道を、ピンクの線がなぞっている。

②私は胸がどきどきした。自分がやったことではない気がした。証拠を残したなと思った。

（どうしよう）

このままにしておいたら、誰か大人がやってきて、花をつんだことをじっとしていてくれるだろうか。

私はいいことを思いついた。

「家まで、つれていったげるよ！」

C―3の505号室まで、道しるべをつなげればいいのだ。誰かが、これを見てやってくるなら、当然、*4伊山佳奈の家まで来なければならない。誰か？　誰？　誰だろう。すてきなお客さんがいい。⑤五月のすてきなお客さんにきまってる！

（佐藤多佳子『五月の道しるべ』）

＊1七歳も六歳も＝「私」と弟のこと。

＊2見とがめられる＝（見た人に）あやしいと思われて注意される。

＊3A―36＝団地の建物を表す記号と番号。AはA棟のこと。

＊4伊山佳奈＝「私」の名前。

問一　―線①「私は一番おしげのない感じのオオムラサキをつんだ」とありますが、取ってはいけない花であるつつじを「私」がつんだのはなぜですか。「私」の考えが書かれているひと続きの三文を文中からさがし、そのはじめと終わりの四字を書きぬきなさい。

□□□□～□□□□

問二　―線②「私は胸がどきどきした」とありますが、それはなぜですか。もっともよいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　花がかわいそうだということに気づき、悲しくなったから。

イ　道しるべがとてもきれいだったので、うれしくなったから。

ウ　道しるべの色や形のあまりの美しさに、びっくりしたから。

エ　誰かに見つかって、怒られるかもしれないと思ったから。

を怒るかもしれない。でも、ひろってしまうのはいやだった。知らない間に出来た花の道しるべは、どうしようもなく、私をわくわくさせたのだ。何か特別な意味があるような気がした。たとえば、物語の中の大好きな人達を、ここに連れてきてくれるような……。

私はすっかり夢中になった。

もっともっと、きれいにしよう。③誰もがあっと言うほどきれいな道しるべを作ろう！

オオムラサキの花をきちんとふせて置き直す。淡いピンクのアケボノをちぎって、オオムラサキの花の間にいれてみる。道のはしまで走って様子を見る。

うん。なかなか。でも、もうちょっと。

キリシマもたくさんつんだ。薄い黄色のヒカゲツツジも並べてしまった。

道しるべは、まるで美しい花のくさりのように、その世で一番かわいいヘビのように、舗装道路の上に横たわった。私はながめて満足した。

午後の日がだいぶ傾いている。建物のかげがどっしり道に広がって、花の色をなんだか寒い感じにしている。*3A―36のベージュの壁は西日を受けて、やけに赤っぽく見えた。私は放り出したランドセルを背負った。急に家が恋しくなった。

何かに熱中していて、④思いがけず時間がたってしまったことに気づくと、いつもちょっとだけこわくなる。A棟の建物や人のいない道がひどくよそよそしく見え、帰ろう、さあ帰ろう、と胸の中で号令をかける。

だが、なかなか動けなかった。この道しるべ、そのすばらしい花の道しるべを残していくのがつらいのだ。

「ごめんね。帰らなきゃ。明日、明日、また来るから」

道しるべに話しかけたが、明日まで、花の列はそこにあるだろうか。

問三　―線③「誰もがあっと言うほどきれいな道しるべを作ろう！」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1)　道しるべを作るために、「私」がつんだつつじの種類を文中からすべて書きぬきなさい。

□□□□

(2)　できあがった道しるべを、たとえを使って表現している一文を文中からさがし、そのはじめの五字を書きぬきなさい。

□□□□□

問四　―線④「思いがけず時間がたってしまった」とありますが、夕ぐれの情景が書かれているひと続きの三文を文中からさがし、そのはじめと終わりの四字を書きぬきなさい。

□□□□～□□□□

問五　―線⑤「五月のすてきなお客さん」とありますが、「私」にとっての「五月のすてきなお客さん」とは、たとえばどんな人ですか。文中から十一字で書きぬきなさい。

□□□□□□□□□□□

文章たんけん

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

①私はスカートのすそを持って、つつじの花を手当りしだいにつんでいった。もう色は何でもかまわなかった。たくさん、たくさん数がいるのだ。別れ道や曲がり角に、ちゃんと置いていけるだけのつつじが必要だった。

最初に音がした。私はあんまり夢中になっていたので、そのすさまじいガラガラが自分のそばに近づくまで、気づきもしなかった。ガラガラガラガラ。道路を車輪がこする音。普通の自転車なら、あんなにうるさい音はたてない。ガラガラガラ。まだ自転車に乗れないチビがつけている補助輪のひびきだった。

私はふりむいて、弟の進が、真新しい補助つき自転車で、つつじの道しるべをひいていくのをじっと見ていた。なぜか、声をたてることができなかった。

大小四つの車輪が、濃いピンクや薄いピンクや朱色の花を次々とふみつぶしていく。私は自分の胸がつぶれるような思いがした。道しるべがこわれる！

進は私に気がついた。

「あっお姉ちゃん……じゃなくて、*1カーナ」

彼は感心にも私をカーナと呼んだ。大きな黒目がうれしそうに光っている。進もまた、親の言いつけを破り、一人でこんなに遠くまで来ていたのだ。だいぶ心細かったところ、思いがけず私を見つけて喜んだのかもしれない。

だが、私は返事をしなかった。②進は、私が手をはなし、スカートから足元にこぼれ落ちたたくさんのつつじの花をまじまじと見た。

でくろぐろとして見える。私は、そのもっそりとした不気味なかたまりから目をそらした。それは、つつじでも道しるべでもなく、私のぜんぜん知らない*2不吉でいやなものだった。

（佐藤多佳子『五月の道しるべ』）

＊1カーナ＝「私（佳奈）」は、自分を「カーナ」と呼ぶように弟の進に言ってある。

＊2不吉＝悪いことが起こりそうな様子。

問一 ――線①「私はスカートのすそを持って、つつじの花を手当りしだいにつんでいった」とありますが、このときの「私」の様子を表すことばを文中から二字で書きぬきなさい。

問二 「私」の気づかないうちに、進が「私」のそばに近づいてきていたことが書かれているのはどの段落ですか。その段落のはじめの五字を書きぬきなさい。

問三 ――線②「進は、私が手をはなし、スカートから足元にこぼれ落ちたたくさんのつつじの花をまじまじと見た」とありますが、このときの進の気持ちをのべたものとしてもっともよいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　つつじをそんなにたくさんつむなんて、いけないんだ。

イ　そんなにたくさんのつつじをつんで何に使うの。

ウ　いろいろな色のつつじがあって、とてもきれいだね。

エ　せっかくならべたつつじをひいてしまって、ごめんね。

「ああ、あーあっ……」

いっけないんだっと言おうとしたのだろうが、その前に私はおんおん泣きだしていた。

「こわしたぁ、こわしたぁ、進のバカぁ」

弟は自転車にまたがったまま、ひどくおびえた顔をした。でも、私は彼を指さして、泣きながらどなった。

「あんたが悪いのよ。直してよ。もとどおりにしてよ」

進は自転車がふみにじった花の道しるべと私の顔をかわるがわる見比べた。そして、自転車をおりると、道に散らばったつつじの花を一つ二つひろい上げて、③また私を見た。

「直してよ！」

私はさけぶ。一度かんしゃく玉がはれつすると、とことん泣きさけぶのが私のくせだった。

大切な花の道しるべ。あんなきれいなものの上をどうして自転車で走ることができるのだろう。なんでこんなバカな弟がそばにいるのだろう。急に冷たく強くなった夕方の風が、車輪にひかれた花の列をいよいよバラバラにこわしていった。

私は泣きながら自転車を足でけった。進の補助つき自転車。あのいまいましい新品の自転車。がしんと耳ざわりな音がして、自転車はよろめいたが、三十センチほど地面をすべっただけで、たおれなかった。④進は怒りもせず、ますます大きく目を見開いた。やがて、彼は道に散らばったつつじの花をひろい集めて、自転車のかごに入れた。つぶれた花も、無事だったものもおかまいなしにどんどんひろっている。自転車をそのままにして自分がちょこまか動きまわるため、全部の花をひろってしまうまでにはずいぶんと長い時間がかかった。

⑤かごにぎっしりつめこまれた明るい色の花たちは、夕ぐれの光の中

問四 ――線③「また私を見た」とありますが、このとき、進はどんな顔をしていたと考えられますか。文中から八字で書きぬきなさい。

問五 ――線④「進は怒りもせず」とありますが、進はどんなことに対して怒らなかったのですか。次の〔　〕にあてはまることばを書きなさい。

・姉に〔　　〕こと。

問六 情景をえがいた部分のうち、つつじの道しるべをこわされた「私」の気持ちや、「私」と進の関係を暗示している（それとなく表している）一文があります。その一文を文中からさがし、そのはじめの五字を書きぬきなさい。

問七 ――線⑤「かごにぎっしりつめこまれた明るい色の花たち」は、「私」にはどんなものに見えましたか。文中から二つ、十五字と十八字で書きぬきなさい。

文章たんけん

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

帰宅後、つつじの道しるべのことを母に話すと、母は進より「私」を怒った。おもしろくない「私」は、進に明日の朝までに花をもとどおりにするように言った。その夜、「私」がお風呂に入っていると、進が浴室のドアを開けて、つつじの花びらを「私」の頭にかけた。

進は、砂場用のバケツを空にしてしまうといかにも気分よさそうに、にやりとした。私はあっけにとられて弟を見つめた。頭から花びらをすくって手の平でながめると、つつじはだいぶおおざっぱに引きさかれている。それにしても、やわらかい花びらをこれだけちぎるのは、ずいぶん根気のいる仕事だろう。

ドアのしまる音がして、進は姿を消した。私は、①湯船に浮かんだこまかい花びらを、お湯と一緒にじゃぶじゃぶすくった。それはとてもきれいだったが、こわくもあった。花が完全に死んでしまったのがわかるので、こわかったのだ。紅や朱や濃い桃色のかけらは、花の血のようだ。進が花を殺してしまったと思い、私は湯船の中でみぶるいした。

A棟のわき道に咲きこぼれていたつつじ。その枝先の生きている花が頭に浮かんだ時、②私は悪いのは自分であることに気がついた。私がむしりとって、私がすてて、進がつぶして、進が引きさいた。でも、最初は私だ。

自転車が道しるべをひいてしまった時のショックが、あまりに大きかったため、進ひとりが花をめちゃくちゃにしたような気持ちがしていた。だから、母が進より私を怒るのがゆるせなかったのだ。

生きている花をつんだのは私なのに、それが美しい道しるべであるうちは、つつじが死んでいることがわからなかった。花が、自転車の急にほのぼのとおかしくなった。進の気持ちが、そっくり理解できた。弟は私に言われたとおり、傷ついた花をもとにもどそうとがんばったのだ。彼はセロテープとセメダインを使って、破れた花びらをつなぎあわせようとした。きっと、さんざん苦労したのだろう。どうにもならなくて、頭にきて、ついに、花をばらばらにしてしまったのにちがいないのだ。

私はなんだか、ほっとしたように明るい気持ちになって、湯船から、ざんぶりとあがった。

（佐藤多佳子『五月の道しるべ』）

＊1セメダイン＝接着剤（物と物をくっつける薬品）の名前。

問一 ——線①「湯船に浮かんだこまかい花びら」は、「私」には何のように見えましたか。文中から三字で書きぬきなさい。

問二 ——線②「私は悪いのは自分であることに気がついた」とありますが、「私」がそのときまで、悪いのは進だと思っていたのはなぜですか。その理由が書かれている部分を文中から三十五字でさがし、そのはじめと終わりの四字を書きぬきなさい。

〜

問三 ——線③「かすかな悪い予感」とありますが、このとき「私」はどんなことをかすかに予感したのですか。もっともよいものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

ア つんだつつじの花びらは死んでいるのではないかということ。

イ 「私」に怒られた進は傷ついたのではないかということ。

ウ 母は進より「私」を怒るのではないかということ。

エ 悪いのは進ではなく、「私」ではないかということ。

かごの中の黒いかたまりになった時、③かすかな悪い予感がめばえた。そして、進が花を小さなかけらに変える。血のような花ふぶきにとりまかれた今、私はすっかりおびえてすくんでしまったのだ。

自分がとてもとても残酷な気がした。明るい色の小さな花のかけらが、髪やはだやお湯の上や白いタイルの洗い場の床に散っているのを、きれいだなと思い、こわいなと思い、胸がどくどくと鳴って苦しかった。

私は本当に長いこと、お湯の中で、身を堅くしてじっとしていた。湯気が頭につまって、なんだか首がくらくらするようだった。

「ちょっと、いつまではいってるの！」

母が私をひきずりだしにやってきた時、その力強い声に、はっとして目をみはった。しかし、母は私よりもっとはっとしたらしく、小さな悲鳴をあげたのだった。

「何？　何よ、これ！」

色とりどりの〝つつじ風呂〟。

私はまだぼんやりとしていて、返事が頭の中に用意できなかった。

母は、湯船に浮かんだつつじのかけらを手ですくいあげた。

「まあ……」

なんとも言いようがない声で、母はうめいた。

「つつじよ」

私はやっと声を出すことができた。そして、身の安全のためにつけくわえた。

「［　　］」

母はお湯の中をかきまわしていたが、④透明なおかしな形のかけらを、いくつか手の平にすくいあげた。それは、もちろん花びらではなかった。私はしばらく考えてみた。そして、ようやくその正体がわかった。丸めたセロテープとセメダインのかけらだ。

問四 ［　　］にあてはまることばとしてもっともよいものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

ア とってもきれいでしょ

イ あとでお母さんも入ってよ

ウ 今日つんだつつじよ

エ 進がやったのよ

問五 ——線④「透明なおかしな形のかけら」の正体は何でしたか。文中から十八字で書きぬきなさい。

問六 この文章は、次の［　］内の四つの場面に分けることができます。第二、第三、第四場面はどの段落から始まりますか。文中からそれぞれの場面のはじめの四字を書きぬきなさい。

〈第一場面〉進が「私」につつじの花びらをかける場面。

〈第二場面〉花びらが浮いた湯船の中で、「私」がいろいろと考える場面。

〈第三場面〉おふろで、母と「私」がやりとりする場面。

〈第四場面〉「私」が進の気持ちを理解して、明るい気持ちになる場面。

第二場面

第三場面

第四場面

○○ 4 やきもののはなし (1)

P17
(6) (1) 氏名　(2) 辞書　(3) 古典　(4) 梨　(5) 記念
予約　(7) 以下　(8) 種目

P18
〔文章たんけん〕
1 問一 土のねんど　問二 A ウ　B エ　問三 イ
問四 (1) 水をくわ(〜)まる性質
(2) 土間・レンガ・食器（別解 土器）
問五 地震がなく、しかも雨の少ない地方
問六 ねんどでレンガのかたちを作ったもの。
問七 〈長所〉だれにでもかんたんに作れる。
〈短所〉こわれやすく水がもれやすい。
問八 ウ

解説
問四 (2) 19行目の「たとえば」（例をしめすときに使うつなぎことば）、そして、次の段落にある付け足すはたらきをする「また」という、二つのつなぎことばに着目する。
問八 日干しレンガは、「水につけるとすきまに水がはいり、もとのねんどのつぶにとけてしまいます」とあるので、ウが文章の内ようと合わない。

P20
研→起→祭→運→暗→駅→ゴール

解説
「研」の9画から始まり、「起」10画、「祭」11画、「運」12画、「暗」13画、「駅」14画となっている。

○○ 5 やきもののはなし (2)

P21
(6) (1) 説明　(2) 方法　(3) 分類　(4) 苦労　(5) 茨
福岡　(7) 改正　(8) 埼玉

P22
〔文章たんけん〕
1 問一 風のぐあい・やね　問二 弥生式土器が焼かれた窯。
問三 (1) イ　(2) 生活の実用品
問四 (1) 茶や豆、ゴマなどをいるとき。・もちや魚を焼くとき。
(2) われやすくてあつかいにくいせい
問五 ④ カ　⑤ ウ　問六 プラスチック・アルミニウム・鉄

解説
問三 (2) 24〜25行目に「どの製品も……生活の実用品でした」と、「ここでつくられた素焼き製品」に共通していることが書かれている。
問四 茶いらかし（ホーロク）の形や使い道を説明している部分に着目する。「また」というつなぎことばにも注意しよう。

P24
〔ことば・コトバ・言葉〕
1 (1) ア　(2) イ　(3) イ　(4) ア　(5) イ　(6) ア
(7) イ　(8) ア
2 (1) 3　(2) 5　(3) 2　(4) 4　(5) 7　(6) 8
(7) 3　(8) 1　(9) 2
3 ウ・カ・キ
⑦ 線　① 時　② 理　③ 細　④ 思　⑤ 休　⑥ 始
⑧ 鳴　⑨ 柱

○○ 6 やきもののはなし (3)

P25
(6) (1) 城　(2) 要点　(3) 案内　(4) 観光　(5) 飛行機
観察　(7) 休養　(8) 良心

P26
〔文章たんけん〕
1 問一 五〈種類〉　問二 素焼きの土器　問三 農具と武器
問四 (1) ヒエやアワ、米など
(2) 日本をふくむ東アジア地域〈の人々。〉
(3) これは、ア
問五 ア　問六 ドングリのアクをぬく〈方法。〉
問七 ドングリ・貝

解説
問二 直後の段落に、江戸時代以前には鉄が何に使われていたのか、また、食事を作るのに何が使われていたのかが書かれている。
問三 「くわやかま、なたなどの農具と、刀、槍などの武器」の部分を五字でまとめる。

P28
〔ことば・コトバ・言葉〕
1 (1) ふるとり・8　(2) たけかんむり・6
(3) はつがしら・5　(4) あめかんむり・8
(5) おおがい・9　(6) しんにょう（別解 しんにゅう）・3
2 (1) 7　(2) 8　(3) 5　(4) 11　(5) 10　(6) 11
(7) 8　(8) 8　(9) 7　(10) 14　(11) 13　(12) 8
③ ④

解説
①は13、②は11、③は6、④は26、⑤は10になる。

○○ 7 五月の道しるべ (1)

P29
(6) (1) 完全　(2) 挙　(3) 固定　(4) 成人　(5) 博学
定期便　(7) 栄　(8) 成功

P30
〔文章たんけん〕
1 問一 つつじは(〜)らない。　問二 エ
問三 (1) オオムラサキ・アケボノ・キリシマ・ヒカゲツツジ
(2) 道しるべは
問四 午後の日(〜)見えた。
問五 物語の中の大好きな人達

解説
問一 直前の「七歳も六歳も（＝「私」も弟も）そう考えた」の「そう」が指している部分が、つつじを取ってもだいじょうぶだと考えた理由にあたる。
問二 直後の「証拠を残したなと思った……花をつんだことを怒るかもしれない」と内ようが合うものを選ぶ。
問三 (2) 「のように」というたとえを表す表現に注意して、道しるべについて書かれた文をさがす。
問四 情景とは周囲の景色や様子のこと。
問五 「たとえばどんな人ですか」という設問なので、人を表すことばを文中からさがす。24〜25行目に「たとえば……人達」とある。

P32
1 もも　2 石　3 へび　4 月　5 はと
6 ねこ　7 えび　8 ひょうたん　9 おに　10 雨

8 五月の道しるべ (2)

P 33

(1) 気候　(2) 借金　(3) 利用　(4) 記録　(5) 共有
(6) 観戦　(7) 部隊　(8) 低下

P 34

〔文章たんけん〕

1 問一 夢中　問二 最初に音が　問三 ア
問四 ひどくおびえた顔　問五 自分の自転車をけられた
問六 急に冷たく
問七 ・もっそりとした不気味なかたまり
・私のぜんぜん知らない不吉でいやなもの

解説

問一 「手当りしだい」、「色は何でもかまわなかった」、「たくさん、たくさん数がいるのだ」などから、「私」の様子をとらえる。
問三 直後に「いっけないんだっと言おうとしたのだろう」とある。
問四 「私」が泣きながらどなるので、進はどうしてよいのかわからないのである。そんな気持ちが表れている表情を文中からさがす。
問六 情景は景色を表すだけでなく、登場人物の気持ちや人間関係、その場の様子をそれとなく表す場合もあることを覚えておこう。

P 36

〔ことば・コトバ・言葉〕

1 (1) イ→ウ→ア　(2) ア→イ→ウ
(3) ウ→イ→ア　(4) イ→ウ→ア

2 (1) 新しい　(2) 打つ　(3) しあげる　(4) よい　(5) 休む

3 〈とり〉オ・キ　〈ちょう〉ウ・カ・シ　〈ねこ〉イ・ケ・サ
〈さる〉エ・ク・ス　〈くま〉ア・コ

9 五月の道しるべ (3)

P 37

(1) 熱病　(2) 勇気　(3) 求人　(4) 参考書　(5) 司会
(6) 的中　(7) 水量　(8) 一輪車

P 38

〔文章たんけん〕

1 問一 花の血　問二 自転車が(〜)ったため　問三 ア
問四 エ　問五 丸めたセロテープとセメダインのかけら
問六 〈第二場面〉ドアのし　〈第三場面〉「ちょっ
〈第四場面〉急にほの

解説

問一 「湯船に浮かんだこまかい花びら」を表している表現をさがすと、9行目に「紅や朱や濃い桃色のかけら」とある。「〜のように」「〜のようだ」という表現にも注意する。
問二 直後の段落に、「悪いのは自分である」ことに「私」が気がつく前のことが書かれている。
問四 直前の「身の安全のため」は、自分が母に怒られないようにするためということ。
問六 登場人物やできごとに注意して、場面の分かれ目をとらえる。

P 40

〔ことば・コトバ・言葉〕

1 (1) ウ→ア→イ　(2) ア→イ→ウ

2 (1) 禾・4　(2) 阝・8　(3) 攵・4　(4) 心・7
(5) 口・5　(6) 厂・8　(7) 氵・5　(8) 辶・6

3 ① (1) 7　② (2) 10　③ (3) 9　④ (4) 9　(5) 7　(6) 5
坂　休　柱　他

○○ タームテスト (1)

P 41

1 (1) べんり　(2) せんきょ　(3) やしな　(4) えいこう
(5) もっと　(6) いさ　(7) たね　(8) す

2 (1) 完成　(2) 求　(3) 末　(4) 低　(5) 借
(6) 伝　(7) 量　(8) 老

3 (1) ア　(2) イ　(3) エ　(4) ウ　(5) ア
(6) エ　(7) ウ　(8) ア　(9) イ　(10) エ

4 (1) オ　(2) キ　(3) ウ　(4) ク　(5) イ
(6) エ　(7) ケ　(8) コ　(9) カ　(10) ア

5 (1) イ　(2) ウ　(3) ア

6 (1) 1　(2) 4　(3) 2　(4) 4　(5) 1

7 (1) 5　(2) 10　(3) 4　(4) 9　(5) 18　(6) 16

8 (右から順に) (1) 5・4・2・3・1
(2) 5・2・4・1・3

解説

すべて一度ひらがなに直してみるとわかりやすい。国語辞典では、ことばは五十音順にならんでいて、さらに、清音→濁音→半濁音の順にならんでいることに注意する。また、「ハーモニカ」のように長くのばす音は「ハアモニカ」と読むものとしてならんでいることにも注意する。

9 (1) よじ登る　(2) なだめる　(3) おどろかす
(4) かるがるしい　(5) しめ切る　(6) いそがしい
(7) 悲しい

○○ 10 夏子先生とゴイサギ・ボーイズ (1)

P 43

(1) 自覚　(2) 欠点　(3) 信用　(4) 単調　(5) 灯台
(6) 必要　(7) 愛　(8) 成果

P 44

〔文章たんけん〕

1 問一 あぶない・だめ　問二 ウ　問三 イ　問四 エ
問五 考えこみながら車を運転していた(様子。)
問六 友だち・考えて　問七 ア

解説

問一 直前の正広とおばあさんの会話からとらえる。
問二 おばあさんがあぶないことをさせまいとするので、だれも正広とは遊ばないのだと思った夏子先生は、正広を友だちといっしょに元気に遊ばせてやりたいと考えて、——線②のようにいったのである。
問三 ——線③の「きっぱりことわった」と、直前のおばあさんのことば「あぶないことは、いっさいやらないように申しきかせております」に着目する。おばあさんは正広にあぶないことは絶対にさせないと決めていることがわかる。
問五 「いつのまにか、車は……きていて」から、夏子先生が正広のことで考えこんでしまい、うわの空で運転していたことがわかる。

P 46

1 田　2 兄　3 古　4 右　5 司